

忘れ得ぬ知床の滝

宇敷 辰男

大学一年の夏休みに小学校時代の友人と二人で、列車とバスを使って初めて知床を旅した。国鉄の斜里駅から路線バスに乗って、知床半島のウト口の手前でオシンコシンの滝を観た。その先の秘境の道は一日三便しかバスがなく、カムイワッカ湯の滝はこの時断念した。

その友人は七年前に他界したが、新盆で奥様とカムイワッカ湯の滝が話題になった。彼は二人の息子を連れて世界遺産登録前の湯の滝に挑戦し登った。奥様は中々帰って来ない三人を、幼少だった末娘とずっと待っていたことを良く覚えていてるそうである。

私は世界遺産登録後の知床を十六年前に再び訪れた。妻とレンタカーを借りて知床半島を走り、オホーツク海を目の前に望むオシンコシンの滝に着いた。

緑の木立の間から流れ出る滝は、涼しい飛沫が日に照らされ、真っ白な滝が勢い良く流れ落ちていた。幅広い滝から、天ぶらを一気に揚げる様なきれいのいい響きが轟音になって渡ってきた。

ウト口の先でシャトルバスに乗り換え、断崖の砂利道を走り、ヒグマが生息する深い森を眼下に見ながら、念願のカムイワッカ湯の滝に到着した。

知床連山の硫黄山いおうざんから湧き出る温泉が川に流れ込み、滑らかな傾斜の岩の上を、温かい硫黄泉がすべるように流れている。ツルツルの岩なので裸足になり二人で這って上っていった。下りは後向きで注意しながら慎重に斜面を降りていった。平らな川岸まで戻った所で靴を履いたのが不味かった。石に滑って転んで右眼の上を打撲し出血。メガネのフレームも折れ曲り、先に降りた妻と滝の監視員に応急処置してもらった。

シャトルバスで戻ったウト口の医者には休日でも休診。妻が車を運転し四十分全速で飛ばして斜里の病院で手当してもらった。ウト口に戻る途中オシンコシンの滝の忘れがたい轟音を聴いた時、大きな夕日が夕凧のオホーツク海に沈んでいった。

幸い傷は深くなかったけれど、夫が挑戦したカムイワッカ湯の滝は、私の妻にとっても忘れ得ぬ滝になっている。